



若造の徒然草



那覇市立病院 内科 金城 譲

今回、若手コーナーへの原稿を依頼された時、これまでは大先輩方が投稿されているのを知っていた私は、タイトル自体は私に当てはまるものの、いささか違和感を感じておりました。医師4年目という立場で、いったいどのような原稿が書けるのだろうと、暗澹たる思いですが、これまで感じてきたことを徒然と述べていきたいと思います。

断固たる決意

私は現在、那覇市立病院で内科医師として勤務しています。学生の頃、決して優秀とはいえなかった私は、「このままではいけない。どこか厳しい病院で初期研修を受けて、根性をたたき直さなくてはならない」と一念発起し、とある大阪の、研修が厳しいと有名な病院で初期研修を開始しました。

意気揚々と飛び込んだ先で待っていたのは、想像を絶するすさまじい世界でした。大阪（しかも南！）のある意味情熱的な方々（患者さん、スタッフ、その他大勢）は、普通にしゃべっているだけでも、私には怒鳴られているように聞こえ、恐らく1日100回以上は「すみません」と言っていたような気がします。何も出来ない1年目ということなど全く関係なく、「お前医者やろ」と言わんばかりに次々と仕事が襲ってきます。「とにかく何かしなければならぬ！」と、1日中病院内を走り回っていて、これまでの学生時代のポリクリなどとは全く異なる世界にいることを痛感させられました。

初めての救急当直。緊張しながら問診票を診ると、「37℃台の発熱と咳、痰」と記載されて

おり、「風邪かな、でも肺炎かもしれない。まさか結核？」と、ドキドキしながら慣れない口調で患者さんと呼ぶ。するとドアが開くなりいきなり「いつまで待たせとんじゃコラァ！」と怒鳴る患者さん。その瞬間、挙げていた鑑別診断もいっぺんに吹っ飛んでしまい、固まっている横で先輩医師が対応する、といった苦い思い出もありました。

その病院では、3～4日に1回当直があり、自分が当直をした日に入院になった患者さんは全て自分が主治医になるシステムだったので、多い日は一気に10人近くも受け持ち患者が増え、蟻地獄からいつまでも抜け出せないような気分でした。インフルエンザに罹患し休んでいる同期をすごく羨ましく思い、「お見舞いに行きつつ、ウイルスをお裾分けしてもらおうか」などと考えたこともありました。

当初の期待通り、いやそれ以上にハードな研修でしたが、そこで出会えた底抜けに明るい同期や、尊敬できる上司、周りのスタッフには本当に励まされました。青臭いですが、「夢と目標、そして同じ志を持つ仲間がいれば、どんな環境でも頑張れる」と感じた、本当に充実した2年間でした。多くの患者さんとその症例も、今の自分にはなくてはならない財産となっています。（ついでに嫁さんも見つけました。人生においてもかなり充実した研修でした！）

沖縄に帰ってきて

3年目からは現在の那覇市立病院で勤務することになりました。沖縄では年中インフルエンザ罹患者がいたり、大阪では経験したことのない

ATL や糞線虫症に出会ったり、長袖の白衣が必要なかったり、96歳のおばーが隣のベッドの106歳のおばーに「私はあの方に比べたらまだ子供さあ」と言っていたりと、とても新鮮でした。また、医局には大学時代の同期や、たくさんの先輩・後輩がおり（昔住んでいた家の、その裏にあった家の優しそうなおじさん（失礼な表現ですみません）が、実は現在の院長先生であったことも判明しました！）、いい刺激を受けながら仕事をする事が出来ています。

最近思うこと

最近、怒濤の初期研修時代より少し余裕ができ、いろいろなことを考える時間も出てきました。これまでの少ない経験で感じたのは、患者さんを診ていくうえで必要なのは、もちろん医学的知識や技術はさることながら、それに負けず劣らず「人間力」ではないかということでした。

患者さんにはそれぞれ社会的背景や人生観があり、抱えている身体的・精神的・社会的問題も様々です。

また現在の医療がそれをますます複雑にしている気がします。そういった中で、患者さん一人一人と向き合っていくためには、決して一方的な価値観やマニュアルなど通用する訳もなく、「人間としての、懐の深さ、幅広さ」が要求されていると感じます。「命」が関わっている現場なので、当然なのかも知れません。

これからの目標

その力をつけるためには、やはり人生経験を豊富にしていくことが必要なのでしょう。フォレストガンプのようにいけばいいのですが、現

実はなかなかそうもいきません。いろいろ考えた挙句、一番の近道は本を読むとの結論に達しました。

幸い医局には、非常に読書家の外科部長がおり、その先生に色々な本を紹介して頂き参考にしています。なるべく様々なジャンルの本を読むようにしています。その他講演会に参加したり、いろいろな分野の方々と交流を持つのもいいかもしれません。

患者さんを診るときも、なるべくいろいろな話をしながら、医療的なこと、そうでないことも含め「この人にしてあげられることは何だろうか」と考えるようにしています。限られた時間では全てを実現させるのはなかなか難しいですが、そういった行為が習慣となっていくよう心掛けています。

最終的に、病を癒すのは勿論ですが（癒せない時も多々あります。その場合でも）、患者さんに「病気になったのは決して幸運とはいえないが、これを機に健康の大切さ、家族のありがたさに気づくことができた」と思っていただければ、医師としてこんなうれしいことはありません。関わっていく少しでも多くの患者さんにそう思っていたくのが私の目標です。

最後になりましたが

来年度より当院に内科後期研修医が新たに4人も加わることになり、非常にうれしく思うとともに、これから若い力で病院をますます活気あふれるものにしていけたらと意気込んでおります！那覇市立病院に少しでも興味のある先生方（初期・後期研修医、スタッフ問わず）、ぜひ一度当院にいらしてみませんか。お待ちしております。